
Border Break ～**拡大戦線**～ R.E.36

葉山恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B o r d e r B r e a k ｝ 拡大戦線 R ・ E ・ 3 6

【Nコード】

N 3 0 1 7 X

【作者名】

葉山恭介

【あらすじ】

新エネルギー、ニユードが戦争で奪い合われる世界。主人公、ラミア・グレイスは様々な想いを胸に、人型汎用機動兵器ブラスト・ランナーを操り、その戦火に身を投じる事となる。ニユードの毒に侵された体で彼女は何を為すのか。

SEGAが出しているゲーム「BORDER BREAK」の二次小説です。

01x/ 絵↓http://ncode.syosetu.com/n63
『Border Break』拡大戦線『R・E・36』の挿

1 〱邂逅〱（前書き）

初投稿です

感想や〱指摘などありましたら、よろしく願います

1 邂逅

額から垂れる汗が右目にかかる。

それを右手で拭いながらも前方にいる敵をメインカメラ越しに睨み続ける。

ブラスト・ランナー。それが今の私の手足である。

いや、手足と言ったのは訂正しよう。今、私が駆るブラストは左腕の肘から先が喪失している。目の前にいる敵ブラスト・ランナーに構えていたヴォルペ突撃銃ごと切られたのである。ここまで嫌な感じがする敵に出会ったのは久しぶりだ。

私は嫌な感覚を覚えることがある。それは今までの経験から、敵の罠があったり、エース級の腕を持つボーダーに遭遇した時など、総じてよろしくない出来事に直面した時である。

今もそうだ。目の前にいるブラストは一般的なクーガー？型であるが、白銀のペイントが為されている。私が知る限り、GRF軍の白銀のペイントと言えば、最近噂になっているボーダーしかない。噂によると、新人ボーダーながらも初陣でエース級の働きを見せ、アノ”鬼神”レイウッド・キースからも認められたと言う。その白銀のブラストを前に、私の機体は左腕を失っている。

（無理だな）

私は一通り考えを巡らした後、再び目の前のブラストに注意を向けた。

敵ブラストは先ほど私の機体の腕をブラスト専用近接武器であるデュエルソードで切ってから、様子を見るような素振りを見せている。

エース級を躊躇させる要素などこちらにはないのだが…。

そうして暫く睨みあっていると、敵ブラストが左手の手のひらを上に向け、人差し指を動かした。挑発しているのだ。恐らく、敵にとって私は弱者でしかないから、せいぜい遊ばしてくれという意味だろう。

いいだろう。私は弱いが、小物扱いされて怒りを覚える程には自分の腕前に自信を持っている。相手が油断するならば、一矢くらい報いることはできるだろう。

私は右腕でデュエルソードを抜き去ると、横に水平に構える。

私には片腕でブラストを切る技量が無い。ブラストは基本骨格の上から装甲で覆われている。その為エースでもない限り、装甲を切り裂くことは出来ても、フレームまで切ることとはできないのである。しかし、構造上の弱点は存在する。それは関節部分である。脚と腕にそれぞれひとつずつ存在する関節は、接続部分であるため、少しでも傷を付けられれば、勝手に故障する。

ならば、私にできるのは腕か脚を狙うことだが、この場合私の優先目標は敵機撃破ではなく、この状況から脱することである。狙うなら、腕ではなく脚を潰す。追撃をできなくさせれば、私の勝ちだ。双方、剣を構えたまま動かない。

遠くでまばらに聞こえる銃声は人間同士のものだろうか。やけに小さく聞こえる。

白銀のブラストが動く。私も自身のブラストを前にダッシュさせる。

後ろ向きに強烈なGが発生する。

一瞬で時速70kmまで加速した。

彼我の距離は500mからみるまに縮まる。相対速度時速140km。

交錯するは一瞬。

私は機体を斜めにし、右腕が下側になるようにする。恐らく、敵はこちらの狙いが分かっただろう。慌てた様子で、剣を頭の上に構えた。

しかし、もう遅い。交錯する瞬間に、白銀のブラストの右側に抜けながら右腕を振るう。同時に敵が頭の上から剣を振り下ろすのが見えた。確かな手ごたえと共に、凄まじい衝撃が機体を揺らす。

暫く私は意識が混濁していたようだ。平衡感覚が狂っているが、計器類は機体が倒れていることを知らせている。

私はすぐさま状況を確認しようとしたが、頭部のカメラがやられたようで、外の様子を見る事ができない。すぐさま、サブカメラを起動して白銀のブラストの姿を探した。

いた。私の機体から230mほど前方に倒れている。全く動かないところを見ると、機体が完全に壊れたか、搭乗者が気絶しているのか。しかしどうやら、私の思惑通りにいったようだ。

そこで、初めて自分の機体をチェックする。右腕にあったはずの剣はないが、右腕はついていた。しかし、薄皮一枚と言ったところで、もう使えない。次に、メインカメラが壊れた頭部をチェック。驚くべきことに綺麗さっぱりなくなっていた。どうやら、頭部を切られた後に、そのまま右腕に剣が当たったらしい。

その事実を知って、汗が噴き出ると共に一気に疲労が来た。しかし、まだここで倒れるわけにはいかない。右腕は使えなくなったが、左腕を何とか使い、機体を立ち上げる。脚回りは…よし、いけそうだ。

本来のスピードは出ないが、戦線を脱するには十分な速度を出せ

るなら僥倖だろう。

そこで、もう一度白銀のブラストに目をやる。出来るならば止めを刺したいが、両腕が使えない今、それをするとは叶わない。と、白銀のブラストに動きがあった。コックピットが開き、人が出てくる。アクションがあれば、すぐにでも動きだせるように身構えた。

「よく私の剣から避けながら、脚を潰したわね」

声からすると女だろうが、サブカメラの画質が粗く、よく見えな
い。女はブラストの拡声器を使って私に話しかける。

「私はセリス・キルスティン。貴方、名前は？」

戦場で名前を訊かれるのは初めてではない。友軍から感謝の念から名前を訊かれたことがある。しかし、敵から訊かれるのは初めてだ。一体、何をしたいのだろうか。

「ねえ、聞こえてる？ 貴方の名前よ。な・ま・え」

私が黙っていると、セリスと名乗った女はイラついた様に話しかけてくる。

「私は…ラミア・グレイスだ」

私は若干の苛立ちを憶えつつ、返す。

「ラミア・グレイスね。憶えたわ。ラミア、貴方を倒すのはこの私よ。次に会った時は覚えておきなさい」

セリスとかいう女は明らかにやられ役のセリフを高飛車に言い放

つと、ブラストから降りてどこかに去って行く。

やれやれ、と私は額に浮き出た汗を拭う。

何をするのかと思えば、そういうことか。要するに私を認めて、ライバル視したいというわけか。

拭った手の甲を見れば、血が汗に混じっていた。転倒した時に頭をぶつけたのだろうか、微かな痛みを感じ始める。

まあ、いい。今はとにかく帰って、シャワーを浴びて寝てしまいたい。

私はボロボロになったブラストを操り、味方軍がいるであろう方角に向かった。

2 戦争

西暦2187年、人類は遂に20世紀より唱え続けられたエネルギー問題に対する答えを見つける。

国際研究機関である国際資源連合GRF(Global Resource Federation)は地球の衛星軌道上に建設された超巨大研究施設「エイオース」を拠点に、太陽系を対象にした新資源探査計画「ソテル計画」を実行。結果、「New-Dynamics(新たな力)」(略してニユード)と名付けられる物質を発見する。

ニユードは高いエネルギー効率と共に自己増殖性の性質を持つことから、半永久的なエネルギーになる可能性に高い期待をよせていた。しかし、ニユードには負の性質があった。人体に影響を及ぼす程の強い毒性である。ニユードには無機物質、有機物質関係なく融合する性質がある。その為、空気中のニユード粒子が少量でも体内に入ると融合・増殖を始め、いずれ死に至る。しかし、この負の側面はGRFによって世間から隠蔽されることとなった。

西暦2191年、GRFの宇宙開発施設であるエイオースで爆発事故が発生。貯蔵していたニユードが大量に地球に落下する。結果、大量の人間がニユード汚染により被害を受ける。死亡者数約17億人、汚染者は約1億人と甚大な被害が出た。この事件により、ニユードの強い毒性が世間に知られることとなる。あまりに凄惨なこの事件以後を地球の復興を願い、西暦改め復興暦(Revival Era)とした。

R.E.13年、GRFに不信感を抱いていた人々は、ニユードの汚染除去と平和利用を掲げ、反GRF組織環境保護機構EUST(Environments Union against Space Threat)を発足。GRFのニユード独占を阻止すべ

く、GRFとのニユード争奪戦が始まった。

両組織の争奪戦は「ブラスト・ウォーカー」と呼ばれる2足歩行型採掘機械を用いて行われた。当初は目立った武装衝突もなく、ただニユードをどちらが早く採掘するかという一点のみに絞られていた。しかし、ある事件をきっかけに武装衝突へと発展した。

R・E・35年、ブラスト・ウォーカーを元に開発した、ニユード・ドライブ搭載人型戦略兵器「ブラスト・ランナー」が戦線に投入された。同時に、ブラスト・ランナーを始め、ブラスト専用装備、戦車などの開発事業に参戦する企業が続出。現在も、初のブラスト・ランナー、クーガー?型を発表したTUSMOIインダストリの後を追うべく、様々な企業が日々開発を続けている。

そして、R・E・36年、GRF、EUST間の戦闘は激化の一途を辿っている。

従来のブラスト・ウォーカーに加え、ニユード技術を使用した戦車、そしてブラスト・ランナーが入り乱れる戦場。

高機動を実現したブラスト・ランナーの参戦により、戦場が荒れる。

戦争の在り様が変わっていく時代。

その中で人々は何を思い、何に想いを馳せるのか。

ニユードを巡る戦いが今、本格的に始まるうとしていた。

3 〱EUST司令室にて〱

ラミア side

「グレイス中尉、お前がブラストを壊すのは今回で何回目だ？」

私は今、EUST欧州支部のある一室にいる。あの戦闘から3日たつて、いまある人物に呼ばれていた。その人物とはデスクの向こう側に座り、静かなる怒りのオーラを発している女性である。彼女がEUSTブラスト・ランナー部隊総責任者のレイチェル・エルフィン少将である。

蒼色の瞳で輪郭のはつきりした目。淡い褐色の肌。美しい曲線を描く脚。曲線美の中にアクセントを付ける腰のくびれ。線の細い中で、ひとときわ存在を主張する胸。EUSTの兵士の多くが憧れる女性だ。異性どころか、同性からも敬われる存在である。私も女性としては、彼女のような体に生まれたかった。特に、胸は。

「7回目であります、エルフィン司令」

私は気を付けの姿勢に正し、内心怖がりながらも答える。

今、エルフィン司令が纏う空気は尋常じゃない。何しろ、あの冷静な司令が明らかに怒っているのだから。その様子たるや、もし漫画のように司令の額に怒りマークが付いていても、私は違和感を覚えなないだろう。

「お前が配属されてから1年経つたが、お前はその間に、小破16中破3大破7を記録している。確かに、お前はエース級に遭遇した回数が普通のボーダーより遥かに多い。それは認めよう」

しかし、と司令は言葉を続ける。

「幾らなんでも大破の数が多すぎる。ブラストも無料^{タダ}ではない。そもそも、今回もお前が部隊からはぐれたのが原因で——」

など、うんぬんかんぬん。司令のお叱りは続く。

「——であるから、以後気を付ける。グレイス中尉、聴いてるか？」

「はいっ！ 聴いています、司令」

途中から話を聞き流していたが、怪しまれる前に上手く返事ができただろうか。

「……」

司令が疑うような眼で私を見ているが、気付かないふりをして話を強引に変える。

「そつえば、白銀のブラストについて何か分かりましたか？」

「…お前の報告にあった、『セリス・キルステイン』の事だな？」

司令は少し私を睨みつけるようにしていたが、すぐにいつも通りの冷静な表情に戻ると、デスクの上から数枚束になった書類を私に手渡してきた。

すぐに目を通す。

「これは？」

「諜報部に調査してもらった。しかし、結果はそれだ」

セリス・キルステインに関する調査：成果を得られず

「…調べられなかったということですか？」

「敏いお前なら分かるだろう」

司令が意味ありげに私を見る。

EUSTは巨大な情報網を持つ。それも、意図的に隠していない限りはGRF内部の事すら調べられる。勿論GRF内に諜報員がいるからであるが、今回の場合は…

「GRFがわざわざ隠蔽した」

「正解」

「では、彼女も汚染孤児だということですか」

「可能性はある」

エイオースの爆発によつて汚染された地域は汚染の浄化が為されても、人がリスク無く住めるようになるまで長い時間がかかる。その様な場所は汚染地域でしか生きられなくなった人や、社会的に地位の低い人々が住むには格好の場所となったのである。その為、治安は悪化し、不法投棄や各種犯罪の巣窟となったのである。

中には、間引きの為に子供を捨てていく人もいた。そういった後天的もしくは先天的にニード耐性を得た子供たちを「New-D Polluted Children（汚染孤児）」と言う。

汚染孤児の多くは里親すら居ない為、いなくなっても困る人間が少ない。GRFはそんな汚染孤児を拉致し、軍人へと育成したのである。勿論、これは公式では発表されていない。しかし、GRF兵士の中に戸籍が存在しない者が多数いる事は既に確認されている。

GRFも汚染孤児について知られるのは避けたいのか、隠蔽や偽

装が嚴重である。しかし、逆にそれが黒であることを物語っていた。

セリス・キルステインは汚染孤児だ。私はそう確信する。

私もかつて汚染地域に住んでいた孤児の一人だった。ある時、一人の傭兵に拾われ、その人が私の里親となってくれたのだ。

もしその人が拾ってくれなかったら、私もGRFに拉致されていたかもしれない。そう考えると他人事に思えないのである。

「まあしかし、また今回もよくエース級に遭遇して生きて帰ってこられたな」

「悪運だけは強いみたいです……」

「そう言うな。私はお前のその危機察知能力の高さを買っているんだ。それにお前はエース級を足止めしてくれる貴重な存在だからな」

司令はニヤツと白い尖った八重歯を見せて笑う。女性の笑顔らしからぬが、司令には存外似合っている。

この人は公では真面目で通っているが、一步プライベートに入れば割とだらしない。私は非番の日はよく酒に誘われるが、容姿からは想像できないほどの酒豪で、絡み酒と最悪である。以前、振られた彼氏の愚痴を朝まで聴かされた挙句、酒場で寝てしまったため、私が宿舎までおぶって帰る羽目になったのは記憶に新しい。

誰もが懂れるが、この人が未だに独り身なのはこの性格だからだと私は分析している。

「む、お前、何か失礼なこと考えていないか？」

「い、いえ、滅相ありません」

無駄に勘がいいところも不評かもしれないかな。

「そつだ。ラミア、今夜飯でもどうだ？」

司令が私を「グレイス中尉」ではなく「ラミア」と呼ぶ時はプライベートの時だけである。司令の書斎の壁にかかる時計を見ると、既に17時を回っていた。つまり、今日の仕事は終わりである。

そう言えば、今日は朝から新しい機体の慣らし操縦をしていただけで、部隊の他の面々と顔を合せていない。これから、部屋には帰るから一人には会うのだが…。

「アンナも一緒にいいですか？」

「ああ、構わんが、あいつは下戸だろう？」

「さすがに酒は飲ませませんよ。…後処理がレイチェルさんより面倒ですから」

最後のほうは多少囁くように言う。特に他意はない。

私はそう言い残して司令の部屋を出た。

4 ｝GRF3人娘｝（前書き）

今回から簡単な前書きと後書きを書こうかなと。

小説を書くのがかなり久しぶりで、新鮮な気持ちで書いております。その為、文章表現など違和感を感じると思いますが、ご容赦を。

さて、ここまで毎日更新してきましたが、次からは更新が遅れます。

4 ｛GRF3人娘｝

セリス side

「よおセリス、聞いたぜ。プロアで機体大破したらしいな」

GRF本部の食堂で昼食をとっていた私に、そう言って近づいてきた人物がいる。彼女の後ろにはもう一人が隠れるようにいた。いや、正確には前の彼女よりも身長が大きいので、隠れているといった表現は正しくないだろう。

彼女たちは自分の分のトレイをテーブルに置くと、私の対面に座る。

「なによ、ジン。貴方だってこの前の戦闘でプラスト壊してるじゃない」

私は口を尖らせながら、意地悪を言ってくる友人に抗議した。黒髪を後ろで結び、健康的にやけた肌を惜しみなくさらけ出している彼女はジン・クロムアッド。私の同僚であり、友人である。何故女なのにジンという名前か聞いてみたことがあるが、生みの親が男が欲しかったのに、女が生まれたから名前を考えていなかったそうだ。かといって、考え直すのもめんどくさかったらしく、そのままジンになったらしい。本人は気にいっているみたいだけど。

「セリスと違って、小破だけだな。聞いた話じゃ、転倒して計器類総入れ替えだつてな」

「…ジン。…あんまり言うとセリスが可哀想」

ジンの後ろに隠れていた女性が伏し目がちな視線をセリスに向けてながら聞きとりにくい音量で呟くように喋る。

彼女はミスハ・E・ルインズである。^{エンターマン}彼女は後ろ髪の一部を腰まで伸ばし、髪留めでまとめているが、髪の前についている金属が当たると結構痛い。感情を顔に出さないが、友人として付き合い始めて、最近ようやくわかるようになってきた。さりげなく、毒舌だったりもする。

「ほんと、あのボーダーにはしてやられたわよ」

「ラミア・グレイスだっけ？ それにしても、よく名前教えてもらえたよな。戦場で自分の名前を宣言するのは”鬼神”くらいだと思ってた」

「…キース大佐は特別」

“鬼神”とはGRFのエースボーダー、レイウッド・キースの異名である。プラスト近接武器であるリヒトメッサーを双刀として扱う。一般的なプラストの速度をはるかに上回る機動で戦線を駆け、プラストを一撃の下に真っ二つに切り裂く鬼の如き動きから”鬼神”と呼ばれるているのだ。

「でも、そのラミア・グレイスはエース級じゃなかったんだろ？」

「そうなのよね。でも、射撃も動き自体も並みだったけど、あの大胆さは並みのボーダーじゃありえないわ」

「…セリスにそこまで言わせるなら、かなりできる」

私達3人の実力は兵装が異なるから一概には言えないが、私がエ

「ス級、ジンとミズハが準エース級といったところだろう。2人も、ともすればエース級に及ぶ確かな戦闘技術を持っているが、あのラミア・グレイスは2人とはどこが違う。そう確信させる何かがある。」

「あ、そっぴやセリス、昼飯喰ったら演習だつてさ」

「…ジン、口に物を入れながら喋るのダメ」

ジンがトマトを口に入れながら喋るのを諭すミズハ。

「ってことは、私のブラスト直ったの？」

私はその様子を見ながら、口元をナプキンで拭く。

「なんか、めっちゃルイズ主任が怒ってたけどね。まあ、愛しのブラストを滅茶苦茶にされたからだろうけど」

「あ、やつぱり？」

「…電子機器含め脚、腕、デ剣も総交換。…要するに新規と変わらない」

ルイズ主任とは私たちのブラストを担当する整備主任である。機械をこよなく愛する人で、変た…もとい天才である。元はブラスト・ウォーカーの操縦士兼整備士だったらしいが、GRFにブラスト・ランナー部隊ができる話を聞いて異動を志願したらしい。

「私、食べ終わったから先にハンガーに行ってるわ」

私はトレイを返却口に片付けると、まだ昼食を食べている2人に手を振る。ジンは口に物を入れているためか、今度は手を振るだけにとどめていた。

私はハンガーに向けて歩き出す。

ふと空を見ると、美しい蒼の中に浮く、超巨大構造体―エイオー―スが浮いている。

私を孤児にした原因を作ったものであるが、私が属しているGRの象徴でもある。

私たちはアレを守らなければならない。そう思うと、なんともいえない気分を味わった。

4 〽GRF3人娘〽（後書き）

ミズハのミドルネームの由来が、マインクラフトのエンダーマンなのは秘密。

基本、セリス視点とラミア視点で書いていきたいと思います。途中、書きにくくなったら3人称視点にするかもです。

では、また次回の更新で

5 〽作戦〽（前書き）

久しぶりの更新となります
新学期が始まり、忙しくなったのも含め、ライトノベルを読むのに
時間を摂られてました

5

く作戦く

「うゝ、頭痛い」

「だから言っただろう。慣れないのに酒なんて飲むからだ」

ラミアは宿舎の部屋で反対側のベッドに横たわる少女に、冷蔵庫から取り出したミネラル・ウォーターを渡す。

「ありがとう」

二日酔いでダウンしている紅髪の少女はアンナ・リオッテという。彼女もラミアと同じ部隊のボーダーである。

「しかし、昨日は司令も荒れてたな。そんなに恋人と上手くいったいなら、別ればいいのに」

「司令も言ってたじゃん。せつかく捕まえた一般人だから逃がしたくないーって」

アンナは少しだけ飲んだペットボトルを額に当て、頭痛を和らげようとする。

薬だ、とラミアに渡された薬を飲み下し、再びぐったりする。

「そんな様子で大丈夫か？ 今日には訓練もあるんだぞ」

「う、無理かも」

アンナはよっぱど具合が悪いようで、ベッドから起き上がろうとしない。まだ、訓練の時間ではないから急ぐ必要はないが、朝食の

時間は近い。

「とにかく、朝食にいくぞ。多少具合悪くても我慢しろ」

ラミアはアンナを着替えさせ、部屋を出る。

「ラミア中尉、おはようございます」

部屋を出ると隣の部屋からも人が出てきて、ラミアとアンナに挨拶をした。

「ああ、おはよう」

ひとりは茶髪をツインテールに縛っており、穏和な顔立ちでどこか良家のお嬢様のような雰囲気を持っている。もうひとりは灰色の髪で、無表情などこか冷徹さも感じさせる少女。

どちらもラミアの部隊の人間である。名をジュリア・ランチェスター少尉、セレネ・セルシウス少尉。

「ちようと呼びに行こうと思っていました。携帯端末は見ましたか？」

「ん、ああ、まだ見てなかった」

ラミアはジュリアに促され、自身の携帯を取り出し、軍から情報が来ていることを確認する。

「これは？」

『ブラスト部隊及び第2小隊、第5小隊は8：30からブリーフ

イングを行う。312室に集合』

「予定していた訓練は中止らしいです。それと…」

と、セレネは腕時計をラミアに見せる。

「今8時10分です。朝食は9時までで楽勝ですが、ブリーフィングに間に合うかどうか…」

「まずいな…走るぞ！」

ラミアは後輩たちにそう言い、今にも死にそうなアンナを小脇に抱え廊下をダッシュした。

結局、ブリーフィングには間に合ったが、無理な早食いをしたおかげで、アンナが医務室行きになったのは余談である。

S i d e ラミア

「よし、全員そろっ…グレイス中尉、リオッテ少尉は如何した？」

ブリーフィングルームで椅子の横に立つ私に、エルフィン司令が聞いてくる。正直、酒を飲ませた貴方のせいですよと囁いてやりた
いが…。

「…気分がすぐれないらしく、医務室に連れて行きました」

「そ、そうか。なら仕方がないな。リオッテ少尉には後で説明する

「としよう」

「どうやら、あの顔からすると昨日の事を思い出したようだ。」

「では、司令」

「ああ、始めてくれ」

「では、と私達が席に着くと一人の男が前に出る。」

「今、ここにはブラスト・ランナー部隊第8分隊総勢23名。さらに第2、5小隊の約100名程度である。」

「前に出た男は、第8分隊隊長のアラン・ウォークライ大佐。ついでに言つと私やアンナ、セレネ、ジュリアの直属の上官である。筋骨隆々とした体軀からは想像できないが、彼も相当な腕前を持つボーダーの一人である。ただし、私が会ってきたエース級のような天才ではなく、努力の結果エースと呼ばれるまでに至った数少ない人間でもある。」

「さて、今回の作戦だが、ニユードの採掘場の拠点でもあるGRF要塞バレリオを落とす」

「これを見る、とボードに張り出される地図。城塞都市と呼ばれるバレリオ市街の地形図である。」

「みでの通り、GRFの陣に行くまでの高低差が激しい。また、伏兵を置かれるポイントも多い」

「地図に幾つかの赤い丸が描きこまれる。バレリオは高低差200m縦に5kmを超える街である。最大の特徴は街の中心部を通る川のような排水溝であるが、今の時期は乾季であるため水量が少ない。」

「今回の作戦には試作型電磁加速砲・零式を用い、城塞を落とす。電磁加速砲は中央の排水路を通って敵陣営に行くが、当然敵もそれを予測して伏兵を用意してくるだろう。

そこで、ブラスト・ランナーの3部隊に分ける。スタンフォード大尉、グリース少佐、そして俺を中心に組む。スタンフォード大尉のチームには索敵、先行と敵の排除を。グリース少佐のチームには後方支援と両チームのカバーに入ってもらう。

チームは配った資料に書いてあるから確認しろ」

私はスタンフォード大尉のチーム、メンバーはリオッテ少尉、ランチェスター少尉、セルシウス少尉、トラジス少尉他3名である。

我々は前衛として先行し、試作型電磁加速砲を運搬するウォークライ大佐の援護を行う。同じチームには狙撃兵であるセルシウス少尉もあり、敵の狙撃兵をいち早く発見することが理想。

「以上、質問は？」

反応を示さない様子から、誰も意見は無いようだ。

「よし、作戦は60時間後、23:00開始。各員、一時間前にハンガーに集合。以上、解散」

それぞれ思い思いに動き始める。そんな中、ウォークライ大佐がもう一度声を挙げる。

ブラスト・ランナー

「あー、すまん。BR08分隊の隊員はこの後13:00から訓練だ。第2ハンガー前集合、以上」

大佐は言い終わると、急いだ様子で部屋を後にする。

「グレイス中尉、調子はどうだ？」

「私は大丈夫ですが、リオッテ少尉は…司令が調子に乗って飲ませるからですよ」

「ハッハッハ、いやすまない。リオッテ少尉には私から説明するでしょう」

「全く、我々がB R部隊でなければ軍規違反モノですよ」

そう、我々はあくまで実験部隊である。それ故、正規軍とは系統が違う。当然、エルフィン少将は正規軍人であるが、ウォークライ大佐を始めとする我々ボーダーは傭兵扱いに等しい。まあ、そのおかげで軍規に縛られずに済んでいるというのもあるのだが。

「まあ、そう固いこと言うな」

「あんた、正規軍人だろ」

「私は将官だからな。私より偉い奴なんてそうはいないんだよ」

いや、そういう問題ではないと思う。私は心の中で突っ込みを入れる。まあ、こう言っているも、私は意外と自由なこの部隊が気に入っている。

「そういえば、B Rの陳情書類を提出しなければいけなかった。それでは、グレイス中尉、午後の訓練楽しみにしているぞ」

そう言って、司令は去っていく。午後の訓練…ああ、B R訓練か。あの人は見に来るつもりらしい。責任者だから当然といえば当然

のことか。

私に何を求めているのだろうか。いや、分かっている。おそらく、模擬戦で私に隊長をやらせるつもりだ。

私は面倒臭くなって考えるのを止め、食堂に足を向けた。

5 〽作戦〽（後書き）

こういう軍事物書くの初めてで、慣れてません

挿絵集の方にラミア・グレイスの挿絵を載せました

<http://ncode.syosetu.com/n6301x/>

6 (前書き)

今回からサブタイ考えるのが面倒なので、省きます
ただ、話の中で重要な回となるときはつけると思います

Side ラミア

「ほら、きりきり走れ」

今私達は基地内のトラックを延々と走らされている。後ろからウオークライ大佐が檄を飛ばす声が聞こえる。

いい加減、息が上がり、太ももには乳酸が溜まっている。昼食を取った後から、かれこれ2時間近く走っているのだろうか、しかもこの後BRの訓練も待っている。幾ら体力が無いといけないからと言つて、これはやりすぎではないだろうか。そんな感想が頭に浮かぶが。私はその弱音を握りつぶす。

否、これくらいは軍隊では普通である。戦場となれば、10kg近い装備を担いでの行軍にもなる。そう思わなければやっていられなかった。

我々、ボーダーにとって大切なのはコックピットで長い時間待機できる忍耐力と体力である。常に緊張した状態であの狭い空間に入っているのは精神的疲労が大きい。この訓練はそれを鍛える為に効果的であるという。どこまで続くか分からないという、精神的苦痛の中で、ひたすらに走り続ける。

庸兵育成所でもよくやっている訓練である。しかし、何度やっても慣れないのは何故だろうか。それはきっと、私という人間が弱いからであろう。

まあ、今隣で騒いでいる人間は私よりさらに弱いのだろうか。

「ハアハアハア…もう…無理…死ぬ」

「ハアハアハア」

「……」

私の隣を走っているアンナ（点滴打ったら治ったらしい）、ジュリアは息も絶え絶えといった様子だ。ひとり前に行くセレネだけは息は上がっているものの文句を言うことも無く、黙々とひとり走り続けている。

（全く、2人も見習ってほしいところだな）

「セレネ、お前は大丈夫なのか？」

私は軽くペースアップすると前に行くセレネの横に並んで声を駆ける。

「…だい、じょうぶ…なわけ…ないです」

「あ…そうか」

どうやら見た目とは裏腹にしんどいらしい。

「ほら、リオッテ少尉、頑張って」

後ろからアンナを励ます声が聞こえた。女性のものにしては低く、かと言って低すぎるわけでもない。中性的な声だ。

後ろに目をやると、スタンフォード大尉がアンナとジュリアの隣を走りながら2人を励ましていた。

彼は分隊を取り仕切るウォークライ大佐の補佐役である。ウォークライ大佐はエルフィン司令程ではないが、豪快な人物であると言っておこう。そんな人の補佐なのだから、その苦勞は想像に容易い。そして、私達を直接指導してくれる兄のような存在である。私も1

年前、この部隊に入隊した時は本当に世話になった。今は今年入ってきた3人の面倒を見るのに忙しい様子だ。私も面倒を見てくれと頼まれており、やっているつもりなのだが、やはりスタンフォード大尉に任せるのが一番だ。

後ろから、死にかけたアンナとジュリアの声とそれを励ますスタンフォード大尉の声が聞こえる。

さて、2人の世話はスタンフォード大尉に任せて、私はセレネと一緒にもう少しペースを上げて走るとしよう。ウォークライ大佐にどやされる前に。

あれからさらに走ること30分。精根尽き果てるかと思っていたところで、ようやく終了の合図があった。

その場に座り込む隊員も少なくない。体を屈めて肩で息をする私から少し離れた所では、セレネが地面に膝をついている。その肩は他の人間と同様に激しく上下している。少し向こう側では、ジュリアとアンナが地面にへたり込んでいた。

「お疲れさま。ハイ、これ」

息を整える私の目の前に差し出されたのはスポーツ飲料の入った容器だった。

「ありがとうございます」

容器を差し出したスタンフォード大尉にお礼を言いながら受け取

り、それを口に流し込む。冷たいスポーツドリンクが喉を潤す。

「さすがだね。これくらいは楽勝？」

私は口に含んだドリンクを飲み下すと、体を起してスタンフォード大尉の方を向く。

イアン・スタンフォード大尉。彼は欧米の出身で、ザクセン連邦が地元だという。茶髪、碧眼と整った顔立ちが部隊内の女性に人気である理由だろう。ここに高身長であることも付け加えておく。私にそういった感情はないが、尊敬はしている。彼のボーダーとしての腕は目を見張るものがある。エース級とは呼ばれないものの、戦場で生き残ることにかけて彼の右に出るものはいないと思っている。私が目指す機体運用のイメージそのままなので、しばしば指導をしてもらったりもしている。

「…いえ、さすがにきついです。大尉はどうなんですか？」

「これくらいなら、ってとこかな？ これ以上になるときついけどね」

「しかし、これはやりすぎなのでは？」

「確かにね。でもこれくらいやらないと、君は大丈夫でも新米はいずれ戦場で死ぬかもしれないね。…こここのところ戦況が激化していることは耳にした事があるよね？」

スタンフォード大尉が周りを気にするように小声になる。
私も小声でこれに応える。

「一応は。確か…エアロン・エアハートA・E社が新型BRを開発したとか」

「そうだね。BRができてから戦闘が日常茶飯事になってきた。それだけ死人が出る可能性が増えたってことだよ。昔は小競り合いぐらいで済んだのにね」

「…『コンスタンツァ』ですか」

「…そうだね」

私が呟くと大尉はどこか遠くを見るような眼を虚空に向ける。

『コンスタンツァの虐殺』、R・E・31年に起きた事件の名前である。当時デモを行っていたEUSTのデモ隊とGRFの鎮圧部隊が小競り合いを起こし、最終的にGRFによる一方的な虐殺が起きたという。EUSTはこの事件を機に、本格的に軍隊に力を入れ始めた。今の戦争を作り出した元凶と言われる事件である。とはいえこれはEUSTが発表した事件の概要であり、私は何か裏があるのではないかと思っている。

「まあ、今言えることは備えあれば憂いなしってね。…仲間が死ぬのは悲しい事だから」

大尉は暗くなってしまった空気を払うかのように、明るく振舞う。しかし、その碧い瞳の奥はどこか悲しそうだった。

「…はい」

私は彼の哀しそうな顔を見て、ただ返事をするしかできない。かつて、この人は軍人に向いていないと私は思ったことがある。

それは6ヶ月前、私の同期の仲間が戦死した時だ。勿論、私も悲しんだ。同じ釜の飯を食べ、厳しい訓練を日々やった仲間だったからである。しかし、私以上に悲しんでいたのはスタンフォード大尉であった。たった一人部下が戦死しただけで、彼は泣いていた。

彼は優しいすぎるのだ。時に感情を殺す事も必要な軍人としては不適正であるが、私は彼の優しさは尊いと思う。人の命が軽い、特に汚染された人間の命が軽く扱われる今の狂った世界では尚更だ。もし、彼みたいなのが私の親だったら、捨てられることもなく、軍人になることもなかったのだろう。軍人となった自分を嫌っているわけではないが、戦いが特に好きなのでもない。好きな人間なんてそういない。誰しもが、何かの為に闘っているのだ。

「さて、じゃあ、次はブラスト訓練だよ。気合い入れていつてみようか」

「はいっ!!」

大尉は今度こそ重い雰囲気振り払うと、自らを励ますように大声を出した。私もそれに習い、快活に返事をする。

「ジュリア、アンナ、セレネ、BR訓練だ」

「ふぁ…無理い」

「中尉いゝ…もう走れませうん」

「さすがに…きついかも」

「ほら、立って。行くぞ」

私は大尉に代わって、未だにへばっている3人を立たせ、ハンガ―へと向かった。

6 (後書き)

『コンスタンツアの虐殺』は公式設定の事件です。ちなみに公式設定ではEUST側のデモ隊参加者は全員死亡しています。

この小説では数人の生き残りがいる設定にしています。

イアンは今回初登場ですが、面倒見のいいお兄さんと言った感じ
です。

7（前書き）

1 週間毎の更新となっております

side セリス

今日は3人で下街まで来ている。

ここは城塞都市バレリオ南地区、旧暦19世紀に建築された城を中心に発展した典型的な城下街である。元々、戦争の為に頑丈に建てられた城ということもあり、高い城壁や街を囲うようにそびえる巨大な壁は400年近く経った今でも健在である。

今は街から30km北に行ったところにニユードの巨大な結晶が見られ、この街の住民達も自主的に別の街に移り始めている。

私達が来ている下街もかつては賑わいを見せていたが、今は数えられる程の店が看板を出しているだけで、どこか寂しい。

「やっぱり、皆引越しまったんだな。まあ、こんなご時世だから仕方ないか」

ジンが頭の後ろに手をやり、つまらなさそうにぶらぶらと歩いていく。私とミズハがそれに付いて歩く。

私達は私服で来ている。軍服で来ると住民から冷ややかな目で見られるからである。彼らが避難しないといけなくなった理由はGRFにあるのだから、当然と言えば当然である。

「あそこの店のクレープ、好きだったんだけどなあ」

「仕方ないわ。ニユード耐性を持ってない人間は死んでしまうんだもの」

「全部、アレのせい」

ミズハはそう呟いて空を見る。中空に浮かぶエイオース。

「ミズハ、あんまり口にしては駄目よ。上層部^{うえ}の人間に聞かれたら、何されるかわかったものじゃないもの」

私達は街の真ん中を通る道を下っていく。どこもかしこも店が閉まっている。これではわざわざ下街まで出てきた意味がない。

「おお、あの店やってるじゃん。なあ、入ろうぜ」

ジンがいつも来ていた喫茶店の看板が出ているのを見つけて嬉しそうに笑い、駆けていく。

あの店は手作りのショートケーキが美味しいし、コーヒーもかなり良い豆を使っている。私達は非番の日によくこの店に来ては女の甘味欲求と言うやつを満たしていた。

「あら、いらつしやい」

店に入ると40代半ばの女性が出迎えてくれた。彼女がこの店の主人のリーンさんである。

「私とジンはコーヒーで、ミズハは」

「ミルクね。分かってるわ。カウンターに座って」

店にはテーブル席も幾つかあるが、今日はテーブルの上に逆さにされた椅子が乗っけてあり、使えない。

「あれ？ リーンさん、今日はもう店じまいなのか？」

ジンは待ち時間が退屈だからだろうか、カウンターに頬杖をついてリーンさんに声を掛ける。それぞれの前に飲み物が置かれ、リーンさんはケーキの準備をしながら答えた。

「いや、私もね、そろそろ逃げなきゃなんないのよ。だから、アンタ達が最後の客って訳さ」

「…悪い」

「…すみません」

「…ごめんなさい」

私達3人がそれぞれに謝る。

「アンタ達が悪いんじゃないよ。悪いのはG R Fのお偉い様方だろ」

リーンさんは笑いながら、私達を責めようとはしない。正直、私達はこれだけで救われる。

私達は軍人ではない。正確には雇われの身、つまりは傭兵だ。だが、この身はG R Fによって汚染地域で保護され、その後兵士となるべくして育てられた。G R Fはその事実を隠すために、私達を対外的に傭兵と言う扱いになっている。

しかし、罪悪感が無いわけではない。一応、組織に属する身としてはその辺の責任を感じている。

そうこう考えていると、目の前にケーキが出された。一般的なショートケーキである。切り分けられた断面は2層に分かれており、その間には生クリームとイチゴが挟まれている。さらに、側面と上面にたっぷりの生クリーム。頂上には真っ赤に熟れたイチゴが乗っかっている。

「リーンさん、これって」

「サービスさ。どうせ今日で終わりなんだ。明日には街を出るからね」

私は黙ったままフォークを使ってケーキを一口サイズに切り、口に運ぶ。

口の中に甘さが広がる。ただ、甘ったるい訳ではなく、口に残らない甘さがこの店のケーキの美味しさの秘密である。

「このケーキが食べられなくなるのは寂しいです」

私はコーヒーを一口飲み、カップを皿に置く。

「だよなあ、リーンさんのケーキ喰えないのはなあ」

「…やる気の低下は否めない」

「はっは、嬉しい事言ってくれるじゃないか。コーヒーお代わり、おまけだ」

「ありがとう」

リーンさんは愉快そうに笑うとコーヒーのお代わりを入れに奥に入って行った。

「そっぴやさ、EUSTが近々攻めてくるらしいって話、聞いたか？」

ジンは飲み終えたコーヒーカップを置くと、私とミズハを見る。

「聞いたわよ。EUSTも一般人を巻き込みたくはないだろうから、避難が完了したら来ると思うわ。ミスハ、貴方はどう思う？」

「セリスの言うとおり。多分4日後、明け方来る」

「なんでだ？」

「雨の予報。夜襲掛けるなら最適。ブラストの駆動音も聞こえにくくなる」

「ってことは、ブラスト使ってくるのか」

「まあ、当然よね。ここは城塞だから、人とブラスト・ウォーカーでは簡単には攻められなかった。ブラストが開発されたからこそ可能になったんだわ」

「街が複雑な構造をしてるけど、ブラストならそれを踏破できる」

「この部隊は編成されたばかりで、私達みたいに戦闘経験がある人間が少ないのも不安の一因よね。全く、厄介ね。…ラミア・グレイスに会えるかしら？」

「ここら辺のEUST軍っていったら、リヨン基地の部隊だろ？この前ブローアで闘った奴らじゃん」

「セリスはラミアにご執心？」

「当然。私のブラストに傷を付けた礼を返さないといけないわ」

私はラミア・グレイスに想いを馳せる。これは恋心に似ている。
私が抱くのはラミアに対する一種の憧れと再び相見たいという強い願望。

無名のボーダーはずのラミア・グレイスという存在に何故ここまで
興味が惹かれるのか。私は彼女がどのような人間か知りたい。何故、
惹かれるのかを知りたいのである。

向こうがどう思っているのかは、知らない。どうでもいい。

だって、恋は片思いの方が燃えると相場が決まっているのだから。

私は奥から出てきたリースさんが出してくれたコーヒーを一口飲み、
決意を新たにした。

7（後書き）

3人のキャラが定まらないのは出番が少ないからなのか。
この後、出番を増やせるかどうかはヤル気にかかっている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3017x/>

Border Break ~ 拡大戦線 ~ R.E.36

2011年11月15日07時40分発行